

# いのりと念仏

河野教真

## 序

「いのり」は、語源については様々な説が存在するが、神仏に願うという広義の語意からも「い(忌)」と「のり(宣)」を語源として捉えるのが妥当であろう。また「いのり」はあらゆる宗教において、その宗教現象の根源として捉えられてきたことも周知のことである。しかしながら、浄土真宗においては、「いのり」が自力や現世祈禱につながるとして、その教義の中心より外されてきた。また、親鸞における「いのり」の語の研究は、護国思想の根拠とされていることから、それを中心としたものがその大半を占めているのである。そこで本論では、親鸞の教義においてその「いのり」がどのように位置づけられるのかを、親鸞の諸行等の取り扱いという視点より考察することにする。

## 正定業・助業・雑行・雑修について

諸行の取り扱いについて、善導は『観經疏』散善義の就行立信釈において行の中に五正行と雑行をあげ、読誦・觀察・礼拝・称名・讚歎供養の五正行の中、「一心専念弥陀名号」の称名を仏願に順ずる行として正定業とし、その他の礼誦等によるのは助業としている。しかし、雑行については「自余の諸善」「疎雑の行」とするだけで、詳しく述べてはいない。善導の教義を継承した法然は、五種正行に対する五種雑行を出す等、更に詳細な論理を展開するのである。

親鸞の諸行の取り扱いには、『教行信証』化巻に善導の就行立信釈を、『尊号真像銘文』に法然の『選択集』「三選の文」を引用し、善導・法然を継承するものである。親鸞は『教行信証』化巻において第十九・第二十願を解釈する中で善導の文を引いて五正行の中に正定業・助業・雑行をあげ、さらに自釈において、その正助の中に専修・雑修を出す。専修について唯称仏名と五専(専礼、専読、専観、専称、専讀嘆)をあげ、その中に専心・雑心を出す。また雑修については「助正

兼行」するために雑修とするとしている。雑修については『愚禿鈔』下にも「定散六種兼行するがゆゑに雑修といふ、これを助業と名づく。」として、六種兼行の場合は正定業の称名でさえもその地位を失い、助業として扱われることになるとしている。

以上のように、善導・法然・親鸞の継承・展開において諸行は正定業・助業・雑行の三行に分類され、親鸞においては正助の中に専修・雑修を分ける等、非常に複雑な分類を極めることとなつたのである。

### 親鸞における「いのり」の念仏

前述の通り、諸行の取り扱いについては複雑な分類によつて明らかにされていることが分かつた。そこで本論の中心である「いのり」について、諸行における位置づけを考察する。親鸞は「いのり」の語を『御消息集』、『高僧和讃』に次のように四回用いている。

一、念仏をふかくたのみて、世のいのりに、こゝろにいれて、まふしあはせたまふべし…（『親鸞聖人御消息集』第二通『真聖全』②六九七）

二、この世、のちの世までのことを、いのりあはせたまふべくさふらふ。（『親鸞聖人御消息集』第八通『真聖全』②七一〇）

三、たゞひがふたる世のひとびとをいのり、弥陀の御ちかひにい

れとおぼしめしあはゞ、（『親鸞聖人御消息集』第八通『真聖全』②七一〇）

四、仏号むねと修すれども 現世をいのる行者をば

これも雑修となづけてぞ 千中無一とぎらはるゝ（『高僧和讃』「善導讃」『真聖全』②五〇九）

一の用例では、その後に「御報恩のために御念仏ころにいらてまふして、世のなか安穩なれ、仏法ひろまれ」としていることから、こゝろに世のこと、御報恩のことをいれた念仏における「いのり」であるといえる。

二・三の用例では、「仏の御恩を報じまいらせたまふになりさふらふべし」として報恩行であることを示しているが、「聖人の廿五日の念仏」を例にあげて、念仏をそしる邪見のものをたすけ、弥陀の誓いへと誘引するという意味をもそこに示しているのである。

このように一・三の用例の「いのり」は、報恩のための念仏に伴うものであるため、真実の立場で説かれているように見える。しかしながら、娑婆世界の平和や、仏法の繁盛、さらには念仏を誹謗する者を弥陀の誓いへと誘引しようと思うような「いのり」が自力心によるもの以外のなものでもないことは明らかである、という理解がこれまでの親鸞の「いのり」に対する考えの中心であり、浄土真宗の教義の中心より外されてきた理由の一つとしてあげられるのである。

四の用例では「現世をいのる行者」を雑修としている。雑修については、

助正ならべて修するをば すなはち雑修となづけたり

一心をえざるひとなれば 仏恩報ずるこゝろなし

『高僧和讃』『善導讃』『真聖全』②五〇九

という和讃からも雑修の性質を知ることができる。このことから「いのり」を雑修とする時、それが第十九願の要門より出た方便の「いのり」であることがいえるのである。また助正兼行の場合、正定業である称名でさえも助業と同格に扱われるのであるから、一く三の例の報恩の「いのり」も真実の立場ではなく雑修として方便の立場をあらわしたものとなり、この様な方便としての「いのり」は真実として教義の中心には位置することがないのである。

### 方便の「いのり」より真実へ

以上の様に、親鸞における「いのり」を雑修・方便として位置づけてきたわけであるが、その取り扱いについては、親鸞の真筆の消息である『末灯鈔』第二通にあらわされている。そこには、真実の信心は「釈迦・弥陀・十方諸仏の御方便」のはたらきによつてあたえられるものであるとされ、

しかれば、諸仏の御おしえをそしることなし、余の善根を行ずる人をそしることなし。この念仏するひとをにくみそしる人おもに

くみそしることあるべからず、あはれみをなし、かなしむこゝろをもつべし（『末灯鈔』第二通『真聖全』②六六〇）

というような前述の雑修・方便の「いのり」より、阿弥陀仏の方便のはたらきによつて、「不可思議のたのしみ」である真実の報土へと導かれるとするのである。

諸宗教において「いのり」が信仰生活の基盤であるのに対して、浄土真宗では「いのり」自体が信仰生活の中心ではなく、「いのり」を真実ならしめる阿弥陀仏のはたらきに報酬する生活が、信心の生活の基盤となるのである。

（キーワード）いのり、雑修、信仰生活

（龍谷大学大学院修士修了）